

## 「天寿がん」でいきましょう

がんと共存し、天寿を全うすることは夢ではありません。  
あきらめてはいけません。

私が「天寿がん」を知ったのは、それを定義づけた癌研究所時代の恩師の話からです。

95 歳の長寿を全うされて、まさに死ぬまで元気はつらつとしていた老人がいました。この老人は、あるときから急に食欲が落ちて、ほとんどものが食べられなくなりました。そこで、「私はこの歳までどこも悪いところもなく、健康で生きてきた。ですから、私が死んだらぜひ解剖して、医学のために役立ててください」と言い置いて、食欲がなくなってから、あっという間に亡くなってしまったのです。家族は当然、老衰だと思い、「おじいちゃんは天寿を全うした。幸せな一生だった」と慰め合いながら、病院に献体を申し出ました。

病理解剖してみると、胃の入口に大きながんが見つかりました。食べられなくなったのは老衰のためではなく、がんが原因だったのです。しかし、がんで苦しむこともなく、もちろん、がんがあるとも知らずに、この老人は穏やかに逝きました。

この老人のように、解剖して初めてがんとわかる高齢者の「真正の天寿がん」は、診療技術の進歩によって減る傾向にあります。

しかし、がんが発見されても、的確な治療によってがんと共存しながら 80 歳、90 歳と寿命を全うする場合も、私は「天寿がん」と理解しています。こうなれば、がんも一種の慢性病でしかありません。一病息災というわけです。

がんの萌芽は、人が思う以上に早い時期からありますが、残念ながら、遺伝子診断をしても、何歳で発症するかは確定できません。

発がん研究の目的は、がんの原因論を明確にして、がんの制御の根拠を示し、がんの進展阻止の実際を示すことです。

つまり、がんは遺伝子のがんが変異してがん細胞ができて、外部から意識的に介入すれば、つまり早期発見と適確な治療によって、病状や進行を変えられる表現型(ドラマタイプ)の病気と言えます。また、いずれは発がんに至るとしても、80 歳で発症するのと、40 歳で発症するのでは人生、大きな違いがあるの言うまでもないこと。

40 歳でがんになっても 80 歳まで生きられるように、がんの進行や転移を遅らせる。完治とまでは行かなくても、天寿を全うするまでがん細胞と共存しながら生きていく「天寿がん」の実現化が、がん研究の責務と思っています。

「天寿がんでいきましょう」

この言葉の語感には、がんと共存する人生を患者さんと家族が心地よく受けとめたくなるような、さりげない効能があるようです。

樋野興夫著

いい覚悟で生きる より

